地神盲僧琵琶

成就院玄清法流について

佐藤正映

私がお祀りしています護生院は父の代までは、信者の方に呼ばれて土用経・荒神祓などをして竈荒神のお祀りやご祈祷などをしていました。残念ながらその信仰は消えそうになっています。

信者の家を訪れた天台盲僧は、亀茲琵琶を弾きながら「地神陀羅尼経」を読誦してお祓いを致しました。そこで、「地神陀羅尼経」と天台地神盲僧について少しお話をしようと思います。

盲僧の起源

盲僧の起源につきましては、『成就院縁起』と言う本に次のような物語が書かれています。

昔、印度の阿育大王の皇子に倶奈羅太子という方がおられました。太子は非情な継母のもとに育ちましたが、やがては徳刃羅国の王が崩御したので、請われて徳刃羅国の王になりました。ところが父の阿育王が重病を患い、継母に倶奈羅の両眼を薬にすれば全快すると聞いて、太子は自分の両眼を捧げました。盲目になった倶奈羅王は王位を退き、五歳の金剛太子に手を引かれ琵琶を弾きながら諸国を遊行しました。倶奈羅の妙なる琵琶の音色に感じ、妙音菩薩が降臨して秘曲を授けられたといいます。

太子は治国憐民の心が篤く、仏法によって国家を護ろうと考えて、金光明最勝王経の中の堅牢地神品を誦しながら琵琶を弾じて天下泰平のために力をつくされました。ついに天竺鳩戸奈国の跋堤河のあたりで崩御されました。

その後、阿喉太子・七騎太子は皆眼を病み盲僧になり、拘奈羅太子がこの流れを世に伝えたということです。

やがて、天竺に入った唐の三蔵法師玄奘よって、地神盲僧と「地神陀羅尼経」が唐に伝えられたと言うことです。

我が国盲僧の起源

我が国の盲僧の起源については、『盲僧由来記』によると、

欽明天皇の時代に来朝した百済の盲僧が、日向国の鵜戸の窟で遊教霊師に「地神陀羅尼経」の秘法と盲僧行を伝授したと書かれています。また、韓国でも地神盲僧が読誦する「仏説地神陀羅尼経」と同じ教典が、かつての百済の地で発見されたそうです。（成就院では「祐教礼子」）

遊教霊師は日向佐土原郷、薩摩イサゴノ郷、肥後国ミナマタ、筑後鯵坂、筑前冷泉津、豊前国仲津の盲僧にこの法を伝えて、盲僧達が土公地神祓を勤め地神経を読誦するようになったので、九州・中国地方に広まったそうです。以上のことは何れも伝承によるもので、史実ではありません。

盲僧と天台宗の結びつき

『成就院縁起』によれば、元明天皇が和銅元年（七〇八）平城京（奈良）に遷都して、平城宮を造成するときに、「障碍魔気」が災して、宮殿がなかなか建ちませんでした。天皇は陰陽博士に問うと「堅牢地神」が荒れているからで、鎮西の盲僧を呼んで「地神祓」を行い「土公」の法を行えば無事に静まるであろうと答えたそうです。「土公」は地の精霊です。朝廷は九州の盲僧を招いて地神陀羅尼経を読誦させると、王宮の西北から身の丈七丈ばかりの大蛇が紫宸殿の白砂の上に落ちました。これを盲僧が退治したので、宮中は「静謐」、国土は「安全」になったと言うことです。この功によって盲僧は天皇から「地神盲僧」の称号を頂いたということです。

また、『盲僧由来記』では、桓武天皇の時代、伝教大師（最澄）が比叡山の根本中堂を建立するときに、毒蛇が多くて普請を妨げたので、九州から八人の盲僧を招いて、土公神の法を行ったとも伝えられます。こんなところにも地神盲僧と天台宗との結びつきが伺えます。

延暦九年（七九〇）、人民が疫病にかかって苦しんだことがあります。そのとき伝教大師最澄は朝廷に盲僧の読誦を勧め、地神陀羅尼経の霊力で疫病がことごとく除かれたと言われます。また、最澄が唐から帰朝したとき、盲僧は挙げて山門に登って祝ったといわれます。

座頭集団との争い

鎌倉時代以後になりますと武家の社会になり、それまで盲僧を保護してきた地方の大社・大寺の勢力が衰えてきました。盲僧の中には琵琶の演奏や物語りを主とする遊芸を行う座頭と、古来の地神盲僧の二派に分かれるようになりました。京畿に居た座頭は為政者と結ぶようなって勢力を増し、地神盲僧を圧迫して座頭の組織に吸収しようとする運動を起こしました。

表　　青蓮院鑑札　　裏

あくまで法灯を護ろうとする地神盲僧は、比叡山に救いを求め、江戸時代初めの寛永十年頃比叡山の「正覚院」の支配下になり「天台仏説盲僧」と称するようになりました。ところが、幕府と結んだ座頭集団は、地神盲僧の制度や法衣などについて「正覚院」の扱いを非難して訴訟を起こし、盲僧はこれに破れて「正覚院」を去りました。その後も、西国民衆の地神盲僧への篤い信仰と、我が国盲僧の源流としての誇り、遊芸本意の座頭のおごりに対する反発精神に支えられて熱心に運動を続けました結果、天明三年（一七八三）粟田口青蓮院の庇護を受けることになり、筑前盲僧の本山「成就院」は門跡の末寺となることが出来ました。

玄清法印と成就院

九州の盲僧集団を率いていた僧を玄清と言います。『成就院縁起』によると、玄清は宝亀三年（七七二）筑前三笠郡で生まれました。初めは倶舎宗を修めていましたが、延暦七年、十七歳の時に失明して盲僧になり、

一宗派を立てようと四王寺峰に籠もり、琵琶を弾じながら地神陀羅尼経を誦しました。満願の日に比叡山に登り、最澄に御相ました。玄清は最澄から魔気の様子を聞き地神経を読誦して毒蛇を退治したと言われます。

弘仁七年（八一六）、疫病が流行したとき、最澄に召された玄清を初め諸盲僧が中堂で琵琶を弾奏して地神陀羅尼経を唱えたので、人民の病悩は平復したと言うことです。このとき最澄は玄清に法印の僧位を賜り、五龍王五印ノ法・廻向など天台密教の秘法を授けられました。

やがて玄清は最澄から「成就院」の号を与えられ、帰国後に四王寺北谷に成就院を建立して、一流を立て山門末天台盲僧と称たと言われます。先に述べましたように、比叡山の正覚院が盲僧の管理を放棄した後は、青蓮院の保護を受けるようになりましたが、もともと豊前豊後の盲僧は中世以降は宇佐大宮司が任命する「宇佐別当」の配下にありました。

石垣護生院

北石垣の護生院には膨大の古文書が受け継がれてきました。この中の「護生院系譜」によると、護生院の開山義元は玄清法印百代の孫で、元和九年に志願して宇佐八幡宮に参詣し、寛永七年秋まで八ケ年間宇佐に滞在して勤行していました。その後、豊後国速見郡鶴見村に移り実相寺山の麓に護生院を結んでいましたが、四百年以前旧石垣村に護生院を建てて移しました。

現在実相寺山の東麓の竹林の中に残る五輪塔や宝篋印塔群は曹洞宗実相寺と天台宗護生院の寺跡と思われます。

それ以来法脈は延々と継承されて、私正映は護生院開山の義元より十六代目に当たります。身内が内成、北鉄輪、内竈門、野田、南鉄輪村に法脈を広げ「地神陀羅尼経」を読誦して法灯を護ってきました。

地神盲僧のお勤め

地神盲僧は、京都の粟田口青蓮院の管轄に属していましたが、現在、天台宗の法流には、大分・福岡・佐賀・長崎・熊本・島根・山口に、福岡の「成就院」を宗務所とする玄清法流と、鹿児島・宮崎に日南の「常楽院」を宗務所とする常楽院法流の二派があります。盲僧には晴眼の僧もいますが、地神陀羅尼経を唱える僧はすべて地神盲僧と言われています。

父の代までは毎年四季の土用の期間に信者の家を訪れて、「土用経」として琵琶を弾奏して地神陀羅尼経を唱え、土地神（邸荒神）の「土公神」のお祓いや竈神（内荒神）の三宝荒神の荒神祓いを行ってきました。「土公」とは土地の精霊のことです。

近世になると、天台盲僧は天台密教をひろめ、地神祈祷・荒神祓などの加持祈祷を本来の目的としてきました。盲僧の勤行は本山直属の天台僧と異なって、土俗信仰と接することが多くなりました。その内に民間信仰との融合がはかられて、正月の松配りや御神入れ、ト占、犬神・トウベウ・狐つき・カワタロウなどの憑物落としなども行うようになり、山伏や巫女などと同じように民衆の生活にとけ込むようになりました。

国東半島に伝わっていた盲僧の荒神祓の作法が和歌森太郎編の「くにさき」に掲載されているので転記しておきます。国東の盲僧と私達は同流ですから参考までにあげておきましょう。

「まず、床の間でローソクをともし、線香をたき、琵琶にあわせてお経を誦み上げる。それからお釜様の方を向いて礼拝する。（杵築市年田）」

「まず床の間に、お米、お神酒、お供を供え、ご幣を切って立てかける。線香を立て燈明をあげる。祭壇の準備が整うと、持参の琵琶をかき鳴らして「神降臨」をする。これには、大和おろし、伊勢おろしなどの方式があるという。日本中の神仏の名を誦み上げて勧請するわけである。つぎに家祈祷の経文を唱える。全文を揚げることは煩雑になるので略することにするが、その内容は神仏混

淆のはなはだしい物である。こうして約一時間もかかる経文の読誦が済むと、最後に「神上げをして終わりとなる。（富来中須賀）」

護生院には父晃映が遺した沢山の記録があります。また、文書の中に、星供・地神供・祈祷針秘法・三明拳秘法・荒神供など様々の作法を書いた筆写本があります。

また、盲僧研究には欠かせない貴重な古文書を挙げますと、

一、仏説地神陀羅尼経奉誦盲僧為天台宗因縁　正安三辛丑歳三月（一三〇三）
一、系譜　正徳二年辰六月
一、乍恐口上書以奉願候　正徳三巳五月
一、覚　天明三癸卯八月
仝　寛政三亥年正月
一、定　弘化四丁未四月
一、往来手形　弘化四年六月
一、免許

おわりに

国東最後の盲僧として高木清玄師が平成八年に他界しました。師は後世のために読誦のCDを残されました。福岡県では盲僧琵琶を県指定の無形文化財として伝承に勤めています。

現在眼の不自由な方の仕事は多方面にわたって開かれているので、盲僧志願者は皆無といえましょう。私は名称さえ消えて無くなりそうな盲僧琵琶を守るために、余命をかけて継承に打ち込むことが我が使命であろうかと考えているこの頃です。

幸いにして今年の五月、京都行願寺千年記念碑の建立に際しまして、盲僧琵琶により和讃を弾奏しました。私は十六代の當主として天台宗に帰依して宗憲を守り、また、玄清法流の一員として修錬に励んで布教の一端にしたいと考えております。

参考文献　盲僧　国民民俗学論集2　中野幡能編
豊後国盲僧史料　別府市古文書史料集
「くにさき」　和歌森太郎編
演者と観客　日本民俗文化体系7